

田村市の「エゴマ産地復活」に向けた生産振興

県中農林事務所田村農業普及所

背景

- 田村市では古くからエゴマ栽培が行われており、地域で親しまれてきた。
- 平成15年時点では栽培面積は20.0haあったが、平成23年の東日本大震災により影響を受け、栽培面積は令和元年時点で4.4haまで減少した。(図1)
- エゴマ産地の復活のため、市が主導して船引町生活研究グループエゴマ部と田村市エゴマ生産振興協議会を合併し、令和2年に田村市エゴマ振興協議会が設立された。(図2)

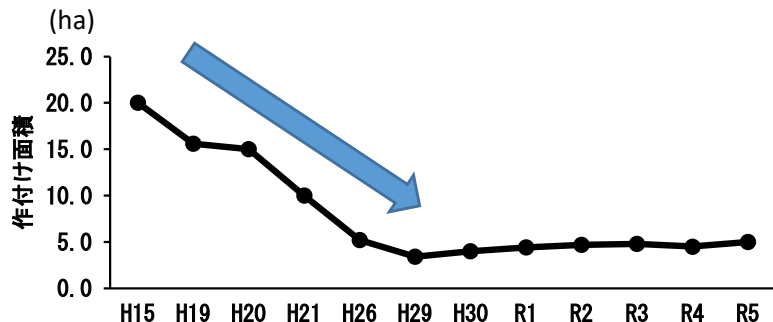


図1 田村市のエゴマ作付面積の推移

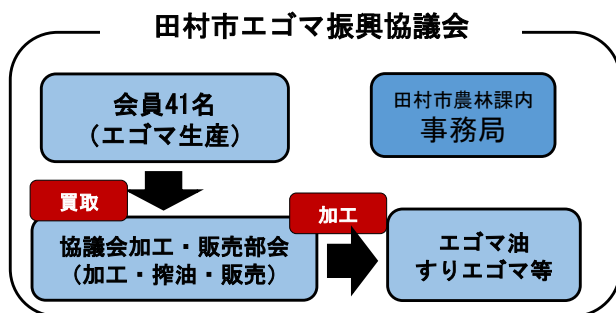


図2 田村市エゴマ振興協議会体制図

ねらい

田村市のエゴマ生産を活性化させ
エゴマ産地の復活を図る

- 1 栽培マニュアルの作成
- 2 作業の省力化
- 3 エゴマ油ブランド力強化
- 4 エゴマ新商品開発

活動内容

1 栽培マニュアルの作成支援

雑味の少ない高品質のエゴマを生産するため、栽培のマニュアルの作成を支援した。



図3 エゴマ栽培マニュアル

2 作業の省力化支援

コンバインと半自動定植機の導入を支援した。



図4 コンバインでの収穫

図5 半自動定植機での定植

3 エゴマ油ブランド力強化支援

福島大学の協力でエゴマ油の成分分析を実施。

「たむらのエゴマ油」
は精製油と同じくらい臭
みは感じないにも関わら
ず、エゴマ特有の良い香
りはそのまま残っている」

～「たむらのエゴマ油」の成分分析結果～
◇油脂の劣化指標値は「ほとんど酸化・劣化していない」
(過酸化値 (POV): 10 未満、酸価 (AV): 2 未満)
【分析機関: 福島大学】
サンプル: 保存期間 12 ヶ月、令和 6 年 1 月調査



図6 完成したエゴマパンフレットより抜粋

4 エゴマ新商品開発支援

6次化サポートセンター、ハイテクプラザと連携しエゴマドレッシングの開発を支援した。



図7 専門家を交えたレシピ開発の様子



図8 試作品

成果

生産基盤の確立（活動1, 2）

栽培マニュアルを作成し、使用する肥料などの栽培管理を統一したことや栽培履歴を残すようにしたことで、安定して品質の良いエゴマの栽培が出来るようになった。

ブランド力向上（活動1, 3）

マニュアル化され管理された丁寧なエゴマ栽培や搾油が評価され、令和5年に「たむらのエゴマ油」が

地理的表示（GI）保護制度に登録された。（図9、10）



図9 市長報告の様子

収益の増加（活動3, 4）

- エゴマ商品の売り上げは増加し、会員数も増加した。（図11、12）
- GI認証を取得したことにより商品開発に向けた意識が高まった。
- FOODEX等の商談会に声が掛かるようになり、国内だけでなく海外に向けても商品をPRする機会が増加した。
- 商談会にて、成分分析をもとに作成したPR資料を用い協議会のエゴマ油の品質の良さを宣伝できた。



図10 GIに登録された「たむらのエゴマ油」

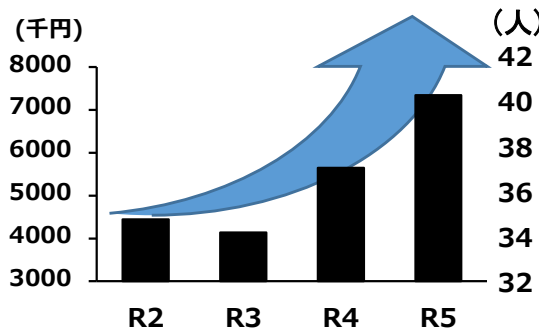


図11 協議会の売上

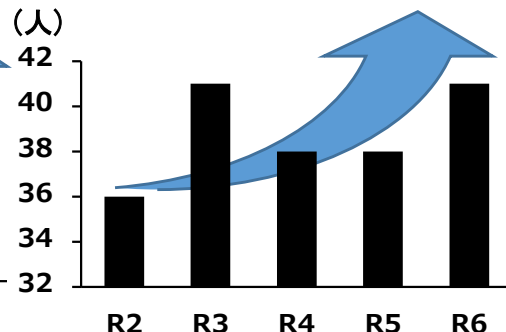


図12 協議会会員数

今後の活動

1 栽培技術支援

有機JAS、GAP取得支援

協議会では海外でのオーガニックへの関心の高まりを考慮し、輸出に向け有機JAS及びGAPの取得の検討をしている。

有機JAS、GAP取得へ向けた課題

- エゴマ生産で問題となるネキリムシ対策の殺虫剤が有機JASに適合していない。
- ネキリムシ殺虫剤を使用しない栽培体系を確立する必要がある。



図13 定植会の様子

栽培方法の普及

- 現地で殺虫剤を使用せず補植を行う体系で高品質高収量を挙げている事例があり情報を収集し整理する。
- 実証ほを設置し、栽培体系の構築と栽培技術の普及拡大を図る。



図14 実証ほ設置予定ほ場

2 新商品開発

ドレッシング開発支援

エゴマPRおよびエゴマ消費拡大のためエゴマを使用した新商品の開発支援を継続する。

ドレッシング開発の課題

- 試作品の製品化に向けて、容器に詰める際の殺菌が課題となっている。
- 使用を想定していた容器が殺菌温度に対して耐熱性が不足しており、代替りの容器も見つかっていない。

ドレッシング開発支援

- 6次化サポートセンターやハイテクプラザ等と連携し、耐熱容器の検討と選定、レシピの微調整等を行う。